ハジマリはふとした瞬間

ただのこうら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハジマリはふとした瞬間

【Ｎコード】
Ｎ３０７５Ｔ

【作者名】
ただのこうら

【あらすじ】
幼馴染との再開から始まる主人公の苦難の物語。
８年前ぶりに幼馴染の篠原由紀と再会した主人公の葵坂圭。しかしその幼馴染は小さい頃と様子はだいぶ違っていて……
戸惑う主人公。
・・・周りにいる女性たちが主人公を取り合う、そんなお話。

＊タイトルを変更しました。
ハジマリトオワリ→ハジマリはふとした瞬間

1話　それはオワリという名のハジマリ（前書き）

また、まだまだ私は不慣れなもので誤字脱字や意味のわからない箇所が存在するかもしれません。もしもなにかありましたらぜひぜひ教えてください。

1話　それはオワリという名のハジマリ

小さい頃に約束したことを覚えている人は果たしてどのくらいいるのだろうか。幼馴染の女の子と「大人になったらここでまた会おうね」などといった約束をしていること自体が稀だ。まして、実際に大きくなってばったり再開するなんてまずありえない話だ。そんな話は空想の産物でしかない。現実ではありえない話なのだが……

「ねぇ、覚えてる？私が引っ越す前に神社の大きな木のところでした約束のこと。」

そんなことが現実であっていいのか。というよりそんな約束した覚えがない。目の前でそんなことを言っているのは幼馴染の篠原由紀だ。あれは何年前だろうか、俺が9歳の時だから8年も前のことだ。由紀は親の転勤で南の島の方に行っていた。そしてまた転勤でこっちに戻ってきて俺の高校に転入してきたというわけだ。そんな偶然が普通はあるだろうか。そして先程の発言に戻る。

「けいくんなら覚えているよね。私はずっと覚えていたもん」

そう言われても8年も前の話なんだから覚えていないのが当たり前だ。しかし、俺はこの幼馴染に覚えていないことを正直に言うと、多分泣くだろうと感じたので嘘をついた。

「あぁ覚えてるよ」

それがすべての始まりだった。いや、終わりと言ってもあながち間違いではない。俺は、後悔はしてもし足りないものだということを学んだ。

1話　それはオワリという名のハジマリ（後書き）

新作・・・（？）です。

2話　その笑みはなんのためなのか（前書き）

続きです。

2話　その笑みはなんのためなのか

「じゃあ、けいくんは私をお嫁さんにしてくれるんだね？」

幼馴染はいたずらな笑みを浮かべながら言った。

久しぶりに再会した幼馴染との二人きりの帰り道。昔にした結婚の約束。一度は誰でも憧れたことのあるシチュレーションだろう。しかしこんな素晴らしい展開が、ドラマや小説以外で起こり得るはずがない。それなのにそれが目の前に起こっている。いや、正確にはおこってはいないというべきだろうか。

実はその幼馴染は、お世辞にも可愛いといえるレベルでなかった。確かに顔は小さい頃の面影を残していて可愛らしい顔ではあった。しかし、身長１６０ｃｍ程度、体重はゆうに７０ｋｇを超えているっていうのはどうだろうか。どれだけ贔屓目に見ても、可愛いとはいえなかった。立派な肥満であった。

９歳の頃まではあんなに可愛くて華奢で、かつ可憐だった由紀に、この８年間の空白の時間の間に何が起きてしまったのだろうか。俺が見てない間彼女に何が起きたのか想像もつかない。

そんなことを心の中で嘆きながら俺は話を何とかはぐらかそうとしたが、苦笑いしか返すことができなかった。

「あー、その笑いってことはもちろん良いってことだよね？
じゃあ私たちはこれから、恋人ってことなんだね」

さっきまでのいたずらな笑みとは違い、満面の笑みで俺の顔をのぞき込んでくる由紀。その笑顔には一片の曇りもなかった。俺は本能で悟った。この女、本気（マジ）だと。

いきなり恋人宣言した（少なくとも俺はそう思っている）由紀は、クラスメイトからの視線を気にすることなく俺につきまとってきた。はっきりいって迷惑だ。いくら幼馴染だからと言っても限度ってものがあるだろう。ましてあの体格でつきまとってくるのは…暑苦しいこのうえない。

そんなこんなでやっとのことで俺は家に着いた。由紀の言葉が耳から離れない。明日からもずっとつきまとわれるだろう。さすがに小さい頃の幼馴染でしばらく離れていたとはいえ、１０年近くは一緒に育って仲が良かったのだ。多少は幼馴染のことを理解している”つもり”だった。

いろんなことを思い出しているうちに俺は気づけばのんきに眠りについているのだった。

2話　その笑みはなんのためなのか（後書き）

誤字脱字等あったら報告お願いします。

3話　玄関際のタタカイ（前書き）

少し手間取りました。すいません。

3話　玄関際のタタカイ

俺はインターホンの音で目が覚めた。朝から何のようだと訪問者を罵りながら起き上がり、ベッドから下りた。そして、玄関の覗き穴から不届きな訪問者を覗いてみた。

俺は驚愕のあまり腰が抜けそうになった。

奴が、由紀が、そこに立っていたのだ。

驚愕はすぐに恐怖へと変わり、頭が一気に冴えていくのがよくわかった。人間というのは危険を感じると逆に冷静になるものなんだな。俺がどういう状況に陥ったか嫌というほどわかった。それと共に感覚器官も敏感になる。インターホンがやけに大きく聞こえてくる。絶対にドアを開けてはいけない。ドアを開けたら死ぬ。そんなことさえ思った。覗き穴から見える由紀は、満面の笑みで俺のことを待ち構えている。俺には血に飢えた肉食獣にしか見えない。

無理だ、やり過ごそう。俺はそう決心した。ゆっくりと腰の抜けかけたまま這っていって玄関から離れた。何度も何度もインターホンが鳴るが俺は出なかった。

「けいくん、起きてる～？」

悪魔のような囁きが聞こえたが聞こえなかったことにした。学校の中で仲良く話すっていうのならまだ許容範囲内だ。そういうのなら学校の友達を失うくらいで済む話だ。それくらいなら昔の幼馴染にくれてやる。それくらい俺は寛大な態度で接しようと思っている。

しかし、俺のプライバシーまで侵食してくるのはたまらない。だって、あの姿かたちだぞ。他人だったら避けている存在だ。いくら幼馴染だといっても限界がある。しかも俺はスレンダーな女が好きだ。あれは正直耐えられない。

それにしても、
なぜ俺の家がわかったんだ。

俺は家の場所を由紀に教えてやしないし、昨日だって家までついていこうとするのを途中で撒いたんだ。だから、奴が俺の家を知っているはずがない。もともと知っていた可能性はない。なぜなら俺は去年引越しをして一人暮らしだ。そのことはクラスの人さえ知らない人はたくさんいるし、親から漏れた可能性は少ない。父親は単身赴任して、俺以外の家族は父についていった。だから、俺はアパートを借りて、そこに暮らしている。篠原家のつながりはない。俺の両親は家族こそ大事にするけど以前お隣りさんだった人なんてすでに連絡は途絶えさせているだろう。

そういうわけで、ベッドのそばまで辿り着いた俺は、まず着替えることにした。さすがに学校を休むわけにはいかない。俺は学校で由紀と出会ったときにどう言い訳するかを考えることにした。
今日は寝坊してインターホンに気づけなかった。だからしょうがなかったんだ。これでいいだろう。最近寝坊癖があるから、明日からも来なくていい。そう伝えればいい。それで多分大丈夫だろう。学校生活は…”彼女”に応援を頼もう。

そう簡単に考えて、俺は学校に行く支度を始また。寝坊ぐせを際出せるために、始業ギリギリに学校に着くようにしよう。

そして、俺は家を出た。

3話　玄関際のタタカイ（後書き）

次は”彼女”の登場です。

＊11月12日に修正しました。

4話　もう一人の幼馴染（前書き）

圭の理解者（？）登場です。

4話　もう一人の幼馴染

家の前には由紀はいなかった。さすがに俺の寝坊まで付き合うことはできなかったようだ。そこまで付いてこられたらたまったものじゃない。

俺は予定通り始業ギリギリに学校に着いた。教室についたときにチャイムが鳴ったがまだ先生は来ていなかった。おかげで少し余裕ができた。

「おい、圭。また寝坊なのか」

声をかけてきたのは、隣の席に座る幼馴染の羽山夏だ。

夏とは中学の頃からの幼馴染だ。中学1年の時に転校してきて俺と同じクラスになって以来ずっと同じクラスだ。高校入ってからもそれは変わることなかった。前に何度か夏に、「ずっと同じクラスになるって不思議だよなー」って言ったら、毎回「偶然は必然。違うクラスになるなんてありえない。そのために私はどれだけの犠牲を…」と小さい声で返される。時々訳の分からないことを言うがいい奴だ。俺がなんか困っていると必ず俺の前に現れて助けてくれる。いつも絶妙のタイミングで現れてくれる。

「あぁ、また寝坊だ。」

俺はクラスの人に質問攻めにあっている由紀のことを見ないように、そして今朝のことを夏に露見しないように注意を払いながら言

った。

由紀は昨日一日中俺につきまとっていたせいでクラスの奴らもなかなか質問できずにいた。クラスの奴らも今朝の由紀が一人でいる時間を狙って質問攻めにしたんだろう。

しかしあの引きつったような由紀の笑顔。教室に入ったときはそうではなかったが、俺が夏と話始めてからあの顔になった。なにやら嫌な予感がした。

大概俺の予想は当たる。こういう時は近くに寄らないでおこう。

そして、俺は先生が来るまでの間夏とたわいもない話をした。

4話　もう一人の幼馴染（後書き）

次からだいぶ遅れると思います。すいません。

5話　そして、戦いは始まる（前書き）

久しぶりのこちらを更新です。

5話　そして、戦いは始まる

午前の授業が終わり、昼休み。
案の定、由紀が俺日か近付いてきた。般若の表情で。
「なんで朝私が迎えにいっても出てこなかったの？なんで教室で声をかけてくれなかったの？なんで顔をそらすの？」
マシンガンのように由紀の口から不平不満の言葉が放たれた。俺はその剣幕にタジタジになった。
「いや、だから朝出られなかったのは寝ていたからで知らなかったんだ。まさか朝迎えに来るなんてさ」
「じゃあなんで朝一番に私に声かけてくれなかったの！」
「いや、いきなりそんなこと言われても…」

すると夏がこちらに来て俺の加勢をしてくれた。
「圭にだって気持ちだったり事情があったりするんだからあまり責めないでよ」
由紀はギロりと夏を睨み、火を吹いた。
「ナニ、アンタ誰？今私はけいくんと話してるの。関係ないでしょ、こっち来ないでよ」
（ずいぶん酷いな、おい。人の友人に向かって何言ってるんだよ。いくら昔の幼馴染だからといっても、さすがに怒るぞ。）
夏は由紀のそんな様子も気にせず言葉を紡いだ。

「別に篠原さんも嫌がってる圭に言葉をまくし立てる必要ないんじゃないの？いくら昔の友達だからと言っても、今は友達じゃないから圭の今の気持ちが分からない。私は圭と友達だから圭の気持ちがわかるの。もう少し落ち着いたらどう？」

けして大きい声ではないが凛とした声で言った。しかし、由紀の怒りは収まらない。

「何、圭って。なんでそんなに馴れ馴れしいのよ？訳の分からないこと言わないでよ！」

「訳の分からないことを言ってるのはあなたの方。圭はあなたのものじゃないわ」

「むきー！ふざけないでよ！」

そして、その由紀ＶＳ夏の口論は昼休みの間中止まるところを見せなかった。（白熱していたのは由紀だけであったが）

5話　そして、戦いは始まる（後書き）

誤字脱字などがありましたらぜひ教えてください。

6話　お隣さん（前書き）

お久しぶりです。いやーこっちも書こう書こう思いながらなかなか話が思い浮かばないもので。すいません。

こちらもぼちぼちと更新していこうと思います。

6話　お隣さん

そして、放課後。俺はまた由紀と夏の言い争いに巻き込まれるのを恐れて、授業が終わると同時に教室から逃げ出した。
言い争いの原因は俺のようだから、俺がいなかったら二人とも言い争いなんてしないだろう。少し頭を冷やしてもらいたい。

それにしてもあの夏が人に何か意見するなんて珍しいことだ。夏は普段冷静で争いを好まない性格をしている。
それなのに何があったんだろうな…。とはいえ俺にはわからないだろう。夏とは大概一緒にいるが、知らないことも多い。俺だって教えていないことがある。だけどそれくらい友達なんだから普通だろう。俺にとって夏は、遊び相手であり、良き話し相手だ。

そして、アパートの前で。
「あらっ、こんにちは。葵坂(あおいざか)くん」
「どうも、こんにちは」

隣の部屋に住んでいる佐倉咲さんだ。彼女は商社でＯＬをやっている。本来こんな昼の間は会社に行っていて、ここにはいないはずだ。どうしたのだろうか。

すると佐倉さんは俺の頭の中にあった疑問に答えてくれた。
「私、今風邪ひいていて会社休んでるの」
「それは大変ですね、大丈夫ですか？」

「体調の方はだいぶ楽になってはいるんだけど。私、料理苦手で。晩ご飯に困ってて」
佐倉さんは困った顔をして言った。
本当に料理ができないようだ。
「もしよかったら私に料理作ってくれない？お金出すから。葵坂(あおいざか)くん料理得意でしょ。もし良かったらお願い！おねーさんを助けると思って」

佐倉さんに懇願された。
別に料理を作ることはまったく迷惑ではなく、むしろ料理を人に振る舞えるという喜びの方が勝っていた。
・・・しかし、なんで俺が料理が得意だということを知っていたのだろう。
佐倉さんに教えたことなんて一度もなかったはずなのに。

まぁ、何かの拍子に知ったのだろう。

「いいですよ、それくらい。何が食べたいですか？」
「ありがとう！なんでもいいわよ、葵坂(あおいざか)くんが作ってくれるものなら。ささ、上がって上がって」

佐倉さんに家に上がるように勧められたのだった。

6話　お隣さん（後書き）

＊11月12日に修正しました。

7話　佐倉さんの部屋

・・・なんか成り行きでＯＬのお部屋にお邪魔することになってしまった。
いくらお隣さんだからといって、こっちは性欲に飢えている（そう見えるかもしれない）男子高校生。対してあっちは一人暮らしのか弱い（俺の偏見が大半）ＯＬ。
怖くはないのだろうか？
しかし佐倉さんが自分で理解してＯＫを出しているんだし、いいのだろう。

「少し汚いけど気にしないでね」
「あっ、はい。お邪魔します」

俺はついに佐倉さんの部屋に入ってしまった。
・・・俺はただ佐倉さんに料理を作ってあげるだけだ。
問題ないはずなんだ。

なんだろうか、この罪悪感。
誰かに見られている気がする・・・

さて、何を作ろうか。
風邪をひいているって言うからお粥のようなものとお浸しにしよう。
そう決めると早速俺は料理に取り掛かった。

・・・と、俺の携帯電話が唐突に鳴り出した。
俺は携帯電話を取り出した。

「圭、どこにいるんだ？」
夏からだった。
とっさに俺は答えることができなかった。
まさか隣人の部屋にいるなんて言えるはずがない。

「・・・・・・もう家に帰ったけど。なんかあったか？」
少し間が空いたが、なんとか返答することができた。

「今から家に行ってもいい？」
なんだ、そういうことか。
「今どこにいるんだ？もしよかったらアイスでも買ってきてくれないか？買い忘れちゃってさ・・・」
「まだ学校だから買ってから寄るよ。
と、・・・あまり変なことはするなよ、圭。
変なことしていたら、オシオキしちゃうぞっ（きゃるーん」

・・・
だらだらだら・・・
冷や汗が出てきた。
夏が冗談を言うなんてよほどのことだ。
やばい、なんかやばい。
俺はその生存本能に従い、この部屋を後にすることを決意した。
佐倉さんには悪いけど。

「佐倉さん、悪いんですけど用事ができたんですいませんが・・・」
俺はそう言いながら振り向いた。
すると・・・
佐倉さんはシャツを脱いで、下着姿だった。

・・・

「すいませんでしたすいませんでしたすいませんでした！！！」

俺は超特急で部屋を出た。

8話　4人目登場（前書き）

どうもお久しぶりです。これからこちらも書き進めていきますので、よろしくお願いします。

8話　4人目登場

俺は佐倉さんに後で料理を届けることを伝えると、大急ぎで自分の部屋に戻った。

少しして。
ピーンポーン
玄関のチャイムが鳴った。

「はーい」
俺は玄関に行き、相手を見ずにドアを開けた。夏が来たのだろうと思ったからだ。
すると、

「おにいちゃん！会いたかったよ～！」

・・・・・・
中学生ぐらいの女の子だった。黒髪をポニーテールにし、俺の胸の高さぐらいの身長で、近くの中学校の制服を着た女の子がそこにいた。その娘は俺の胸元にしがみついて喜んでいた。
えぇーっと

「君は何て言う名前なのかな？」
俺がそう問い掛けると、その娘はしがみついたまま顔だけを俺の方に向き、頬をぷくーと膨らまして言った。

「覚えていてくれてなかったの？

私だよ、かわいい妹の紅葉だよ！」

・・・あぁ、そうかそうか。

そう、俺には3つ下の妹がいた。その妹は去年の父親の転勤についていって俺とは離れて暮らしていた。本当は俺も父親についていく予定だったのだが、俺はそれを拒否してこの街に留まった。

しかし、なぜ今俺の目の前にいるのか。別に今日は休みではないし、特別な日でないはずだ。

「紅葉、なんでここまで来たんだ？親父のところにいるんじゃなかったのか？」

「それがね、お兄ちゃん。

私ね、ここに住むことになったんだ」

・・・ｗｈａｔ？

今なんとおっしゃいましたか？

えっ、ここに住むですと？

「えぇ～！なんでだよ」

「ダメなの？」

「別にだめじゃないけどさぁ・・・」

「いいのね、やったぁ！」

「ちょっと待て、我が妹よ」

「ダメじゃないって言ったでしょ？男に二言はないんだよね」

「・・・・・」

あれ、いつの間に妹がこんな風になったんだろ。あの頃は純真無垢なかわいい妹だったのに。こんなに俺のことを言い負かすようになってしまって。

「わかったわかった。じゃあ、なんでこっちに来たのか、教えてもらおうか」
「お父さんに追い出された」
「Ｏｈ・・・なんということか。あのクソ親父め・・・今度会ったらただじゃ」
「まぁ、追い出されるように嫌がらせしたのは私なんだけどね～」
「前言撤回。親父は悪くない。紅葉が悪い。
紅葉、なんでそんなことしたんだよ！」
「決まってるじゃない。お兄ちゃんに悪い虫が付かないようにす・る・た・め」
「そんなことしなくていいから！」

と、俺と紅葉が玄関先で言い合いをしていると・・・・・・

「圭」
ゾクッ
急激な寒気が俺を襲った。
「なっ」
俺が目を向けるとそこには夏が立っていた。何か空恐ろしいオーラを纏いながら、俺のことを睨んでいた。
「圭、そこの女はだれだ？」
「いや、紅葉はな・・・」
そこに紅葉は口を挟んだ。
「そういうキミもなんなの？せっかく久しぶりの愛を確かめ合っている最中に邪魔するなんてさぁ」

「なんと」
クワッと夏が目を吊り上げた。
「おい、紅葉。変なこと言うな。夏が誤解するだろ」
「いいじゃん、事実なんだし」
「圭、どういうことか説明してもらおうか」
「おいおい、そんな恐い顔しないでくれないか、説明するからさぁ・・・・」

俺がなんとか夏を宥めようとしている中で。
「けいくーん」

・・・・・・
よりによって、なんでこの時に来るんだ？厄介事が増えるだけじゃないか。
「けいくん、これは何なの？なんで羽山（うやま）さんだけじゃなくてもう一人女がいるのかな？」
俺が聞きたい、この状況。

「ねぇ、お兄ちゃん。新しいのが増えたけど何なの？」
待て、俺だって今の状況を理解しきれていないんだ。

「ちょっと待ってくれ、きちんと話すからさぁ・・・・」

そして、隣から佐倉さんが出て来た。
「葵坂（あおいざか）くん、ちょっと忘れ物してたから届けに・・・・
ん？どうしたの？」

なんであなたまで出て来るんですか？厄介事がさらに増えたんですけど！

「お兄ちゃん？」
「圭？」
「けいくん？」

そして、佐倉さんを除く三人はほぼ同時に俺に問い掛けた。

「「「どういうことなの！？」」」

主人公と４人のヒロイン（前書き）

こんな人物で話は始まります。

主人公と４人のヒロイン

☆主人公：葵坂圭（あおいざかけい）

この作品の主人公。１７歳。取り立てて特技があるわけでなく格好いいわけでもないが、何か女性を引き付けるオーラを持つ。後述する４人に好かれている。本人曰く、「なんで俺に付き纏うんだろうな。」

作者曰く、主人公というだけでモテる、はっきりいってズルイ存在。

誕生日は９月１２日。

☆昔の幼馴染：篠原由紀（しのはらゆき）

身長１６０ｃｍ程度、体重７０ｋｇ超えの１７歳の女の子。圭のクラスに転入してくる。料理と裁縫が得意。圭とは９歳まで一緒に育った。圭と結婚の約束をしていたようだ（あくまで本人がそう思っているだけ）。

作者曰く、なんでこんな娘になっちゃったんだろうと頭を抱えてしまう女の子。

誕生日は２月５日。

☆今の幼馴染：羽山夏（うやまなつ）

小柄であまり活発でない１７歳の女の子。中学の頃からずっと圭と同じクラスで、高校入ってからも同じクラスになり続ける。親は実は、財閥の羽山（うやま）グループの会長である。ちなみにこの親は夏の言いなり。

趣味は絵を描くこと。

作者曰く、黒髪のきれいなかわいい娘。クーデレっぽいけど、最

初からデレてる娘。
誕生日は7月２３日。

☆お隣りのＯＬ：佐倉咲（さくらさき）
とある商社に勤める２３歳のＯＬ。女子校出身で男性遍歴がない。
圭の住む部屋の左隣に住む。
作者曰く、こんなガードの甘いＯＬは作品の中だけだよね！っていう女性。
誕生日は４月２０日。

☆帰ってきた妹：葵坂紅葉（あおいざかもみじ）
ポニーテールが似合う１４歳の女の子。圭の妹。父親の転勤についていったのだが、圭の元に行くためにいろいろと画策し、みごと圭の元で暮らす。圭の右隣の部屋に住むことになる。
作者曰く、こんな妹いたら・・・と想像してたらヤバい娘になりましたという女の子。黒髪ポニテサイコー。
誕生日は１１月１８日。

9話　どうやら俺はチケットを落としたらしい（前書き）

お久しぶりです。タイトルを変更しました。「ハジマリトオワリ」から「ハジマリはふとした瞬間」になりました。

9話　どうやら俺はチケットを落としたらしい

「・・・というわけなんだ」
俺はそう言った。

「だから、な？」

俺は重い空気に耐えることができずに思わず叫んだ。
「・・・なんで初対面で重苦しい空気作ってんだよ！」

■■■

俺の妹と再会した俺は、その再会を祝っているところを元幼馴染と、現幼馴染と、お隣さんに見られた。
妹と話していた、ただそれだけのことだ。
それでなんで・・・
俺は正座して４人相手に説明しなければならないんだ。理不尽だ。
かれこれ２時間ばかし３人に妹のこと、紅葉に他の３人のことを説明していた。

「そういうことだったのね」
と由紀が言った。

「早く言ってくれれば慌てることなんてしなかったのに・・・・・・」
と夏が言った。

「へぇ～私がいない間にお兄ちゃん、いろいろやってたんだぁ」
と紅葉が言った。
「・・・なんで私も混じってるのかな？」
と咲さんが言った。
俺はこの状況を見て思わず呟いた。
「これ、どうしたらいいんだよ・・・・・・」
俺は事態を収縮させることを早々に諦めた。

■■■

それから一週間後。
どうにか４人（なぜか佐倉さんも中に入っている）はこの状況を認め折り合いをつけたようだ。
そんなある日。
俺が学校から帰宅する際のことだ。
俺は学校が終わったあと、いつもなら誰かと一緒にどこかに行ったりするものだがそんな気分になれなくて一人で帰ることにした。
校門を出てそのまま家への道を歩いていた時だ。

「あのー」
俺は突然後ろの方から聞こえてきた声に驚き、声がする方を向いた。
後ろを向くと、そこには赤いワンピースを着た１０歳ほどの小さな女の子が立っていた。
「何か俺に用かな？」
「あの、これっ」
そう言って女の子が差し出したのは遊園地のチケットだった。
「何だいこれは？」
「あの、これを落としましたよ」
「ん？俺が？」
「はい、カバンからポロって落としましたよ」
「いや、こんなものは知らないんだけど・・・間違いないの？」
「はい、私後ろで見てました」
「うん・・・じゃあもらっておくよ。ありがとね」
「はい」
そう言うとその女の子はたたっと走っていった。
「遊園地か・・・俺そんなの持ってないんだけどなぁ・・・」
俺は手元の２枚の遊園地のチケットを見ながら呟いた。
「さて、どうしようか」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3075t/

ハジマリはふとした瞬間

2012年1月6日18時55分発行